毎月1日発行・令和4年9月1日発行・通巻284号・平成11年9月28日第三種郵便物認可

フォーNET VOL.284
フォー・ネット

「日本再生」は九州から

愛こそ料理の基本
オーガニック料理普及に
汗かく理由

失敗しても文句は言わない
責任は全て社長が取る――
若い力を思う存分
発揮させる経営とは

時計の針を戻すことこそが
人類の進歩
奥山人工林の天然林化に
人生かけて二五年

安倍氏国葬について考える
国家の理念

好評連載中 西郷どん探訪記
杉山茂丸著「俗戦国策」

2022
9

そこが聞きたい！ インタビュー

時計の針を戻すことこそが人類の進歩
奥山人工林の天然林化に
人生かけて二五年〈パート1〉

森山まり子氏 一般財団法人日本熊森協会 名誉会長

クマたちの棲む豊かな森を次世代に―兵庫県尼崎市の中学校の理科教師だった森山さんは、教え子たちの純粋で熱い思いに突き動かされ、クマの保護活動を始めた。二五年前の一九九七年に大学生になった彼らと「日本熊森協会」を結成。これまでの活動から見えてきたものは―

きっかけは「一枚の新聞記事」

―クマの棲む森をこの国に保全・再生しようと思ったきっかけは？

森山 こういう活動をする前、私は人類という動物に絶望していました。人類は今、地球規模で、自らの生息環境でもある自然を破壊し続け、空気、水、大地を二度と取り去ることのできない化学物質で汚染し、自然界で分解できない物を大量に作り続けて、地球上をゴミで埋め尽くしていっています。これって、文明の進歩なのでしょうか。

二十世紀という世紀は、人類が欲望に歯止めをかけられなくなって狂い始めた世紀だと思っています。自分たちだけが滅びるのなら、それは自業自得ですが、人間の罪深いところは、何の罪もない多くの生き物たちを巻き添えにしながら自滅に向かってまっしぐらに突き進んでいることです。こんなことを考えていると憂鬱になってきます。と言って、自分には何もできないし。私は苦しくて、「見ざる言わざる聞かざる」を決め込んでいました。

一方、中学校の理科教師の仕事は私にとってまさに天職で、毎日の生徒たちとの日々が楽しくてたまりませんでした。

そんな一九九二年一月のことです。『動物の世界』という単元をやっていたら、中一のひとりの女生徒が一枚の新聞記事に作文を添えて提出してきたのです。記事には、ガリガリにやせたクマが山から出てきて射殺され、両側から笑顔のハンターに持ち上げられている写真が付いていました。

見出しには、大きな字で、「オラこんな山いやだ　雑木消え腹ぺこ眠れぬ　真冬なのに里へ…射殺　ツキノワグマ環境破壊に悲鳴」と書かれていました。最初は何のことかわからなかったので、丁寧に記事を読みました。そして、大きな衝撃を受けたのです。理科教師なのに、日本の森や野生動物たちがどんな大変なことになっているのか、それまで全く知りませんでした。

この新聞記事によると、日本では戦後、林野庁の拡大造林という国策によって、日本列島の脊梁山脈に広大に残されていたブナなどの原生林が皆伐され、山奥にまで林業用のスギやヒノキだけの植林が進み、その結果、日本の森の動物たちは食と住の両面から追い立てられます。平成になると山からどんどん出てくるようになり、駆除が急増します。ツキノワグマは九州ではすでに絶滅、西日本でも絶滅の危機に瀕していると書かれていました。

かつて森を荒らした文明は水を失い、すべて滅びていることは私も知っていましたが、奥地に延々と続く緑の山が、動物たちが生きられない針葉樹だけの人工林に変えられたものだったとは全く知りませんでした。生徒たちも知っておいた方がいいと思って、この記事と彼女の作文を『理科だより』に載せました。

その結果、生徒たちが騒ぎ始めたんです。人間は皆、他生物に共感する遺伝子を持って生まれてくると思います。生徒たちはまだこの本能を失っていませんから、「大人のしていることは絶対に間違っている。先生、ツキノワグマの絶滅を止めてやろうや」と言い出しました。私は困ってしまいました。そんなことをする気はなかったし、そんなことをする力も時間もありません。教師は昼間、学校で仕事をしていると思っておられる方が多いと思いますが、教師の本当の仕事は夜なんです。「明日どんな授業をしようか」と自宅に帰っていろいろ調べ物をしながら、日付が変わっても明日の授業の脚本を書く日々でした。生徒が感動するような日本一の授業をしたいと思うタイプの教師でしたからね。

私は、「自然保護団体とか、そういう人たちが動いてくれるから、任せておけばいいの」と、逃げました。しかし、調べてみると日本にはそういうことをする団体がなかったのです。毎回、授業に行く度に、生徒たちから「クマの絶滅を止める人は現れたの？」と尋ねられ、私は追い詰められていきました。

生徒たちに突き動かされる

―生徒たちが立ち上がってしまったようですね。

森山　私はこの問題を早く終わらせたくて、生まれて初めて兵庫県庁に電話しました。自然保護課をお願いしたのですが、クマは害獣で自然保護の対象ではなく、窓口は林務課しかありませんということでした。そこで、仕方なく林務課につないでもらい、「ツキノワグマの絶滅を止めてもらえませんか」と照れながら伝えると、「農作物に被害が出ている。都会の者が何をバカなことを言っているのか」と、ひどく怒られてしまいました。他の県で、こういう声が出ていないか尋ねると、「聞いたことがない」とも言われました。当時の日本の人口は一億二千四百万人です。人間の森林破壊によってクマが絶滅しそうになっているのにたったの一人も守れの声を上げてやる人がいなかったのですね。生徒たちにどう伝えればいいのか、困ってしまいました。

私は専門が物理でしたから、クマに何の関心も知識もありません。図書館でクマの本を探してみると、古びた一冊の本が見つかりました。長野県の自宅の五百坪のリンゴ園で、十頭のツキノワグマと二十年間家族として共に暮らした宮沢正義さんの著書『ツキノワグマ日記』です。この本によると、クマは人間とよく似た動物で、雑食性です。しかし、長く奥山で暮らしている間に、植物食九九％となり、動物食一％の中身は、アリやハチなどの昆虫類程度ということでした。

私は、クマは時々人を襲うと思っていたのですが、宮沢さんに言わせると、クマは人間よりずっ

と平和主義者で争いを避け、人を襲う習性など全くないそうです。マスコミ報道の「クマ、人を襲う」は、至近距離で人間に出会ってしまった臆病なクマが、人間から逃れたい一心で前足で人をひっかくなどし、人間がひるんだすきに逃げようとすることによって起こす人身事故なのだそうです。人間側が鈴などで自分の存在を前もって示すことによって、事故は防ぐことができます。

この本を読んで、たった一人ですが、人間に害獣というレッテルを張られて絶滅させられそうになっている哀れなクマに、同じ生きとし生けるものとして深い愛情を寄せて家族として一緒に暮らした人がいたんだとわかり、私は感動でいっぱいになりました。　出版社に電話して宮沢さんの番号を教わり電話しました。宮沢さんは生物環境学という学問を起こした研究者で、その知識量には圧倒されました。自分は研究者なので、クマの絶滅を止めるような運動を起こす性格ではないし、そのような運動をしている人は日本にはいないということでした。

絶滅する前に、誰かが声を上げねばなりません。

「ツキノワグマ日記」は生徒たちの手から手へと読み広がります。クマの問題は森の問題であると初めから皆わかっていましたから、生徒たちは必死になって森のことを調べ始めました。お昼休みの理科室はいろいろな本を持って集まってくる生徒たちであふれかえるようになっていきました。当時兵庫県のツキノワグマは残り六十頭、絶滅寸前であると言われており、生徒たちは焦り始めました。

私は、当時の生徒たちを見ていて、人は、他者を守るための崇高な志を持った途端、勉強しなさいなど言われなくても、恐ろしいほどどんどん自分で勉強し始めるんだということを学びました。使命感のすごさです。使命感を持った人間からは信じられないようなすごい力が湧き出してくることも知りました。

生徒たちは「ツキノワグマを絶滅させるな」と次々と声を上げ、校内に十六のクマの保護団体が出来ました。かれらの動きはとても早くて、兵庫県のクマ生息地の役場に電話して、「絶滅しかけているので、クマを殺さないでください」とお願いし始めました。しかし、役場の皆さんはどこもカンカンで、「クマと人間とどちらが大事なんじゃ」と、どなられてばかりでした。それでも、生徒たちは全くめげませんでした。

森を守り全生物と共存してきた日本文明

―日本の歴史もずい分調べたそうですね。

森山　日本は歴史のある国ですから、昔の人はどうしていたのだろうかと思ったのです。実は私は、それまで、日本という国に誇りを持てていませんでした。学校では、第二次世界大戦で日本がどんなひどいことをやったか、そればかり教えられていましたから。しかし、いろいろ調べていくうち、日本という国は森を守り全生物と共存してきたすばらしい国だったんだとわかるようになってきて、日本人としての大きな誇りが持てるようになりました。

大昔の日本列島想像図を見ると、山はもちろん、平地も全て森でした。クマをはじめとするいろんな動物が生息していたそうです。日本列島に一番最後にやってきたのが人間という動物です。最初は人間も野生動物同様、狩猟採集生活をしていたのですが、稲作が入ってくると、田んぼを作るために平地の森を次々と伐採していきました。野生動物たちは山に追いやられていきます。人間も山を利用したいですから、室町時代になると日本の山ははげ山になって多くかなり荒れていたそうです。

変化が起きたのは江戸時代です。初期は開発が続いたそうですが、開発するたびに災害が起きたそうです。三百もの藩主が責任をもって自藩を隅々まで見ていたので、開発と災害の関係にすぐ気づいたのでしょう。結果、江戸時代が始まって五十年目にして、幕府は開発禁止令を出します。そのため、人口は増えなくなり、江戸時代の人口は、ずっと三千万人の横ばいで推移しました。

幕府は、今でいう奥山を「入ら

ずの森」として、入山や木の伐採を徹底的に禁じます。「木一本首一つ」と言われるように、違反者には恐ろしい罰則が科されました。これによって奥山には保水力抜群の原生状態の森が保全され、野生動物たちの聖域となったのです。

中国山地の山には、標高八百メートル地点で動物と人との境界線があったことがわかっています。中国山地の祠を研究しているという大学院生の話を聞いたことがありますが、山に入っていくと各地に祠が現れるそうです。ここから先は何人も立ち入ってはならぬという印です。

一方、人々は利用を許された里山に、コナラやクヌギなど人間に役立つ落葉広葉樹を植えて、手を入れ続けました。里山は、昼間は人間、夜は動物と時間を分けて利用され、人と野生動物との緩衝帯となっていました。これが祖先のすばらしい知恵、棲み分け共存です。

この日本の共存の思想は、飛鳥時代まで遡ります。天武天皇が仏教の殺生戒めに基づき「肉食禁止令」(六七五年)を出したのです。当時、唐の国からいろいろなものが日本に入ってきましたが、唐のように肉食をすると森が破壊され草原になってしまうことを知って、水源の森を守るために「肉食禁止令」を出したという学者もいます。私は一度、スイスに行ったことがあるのですが、アルプスにはよく見ると、森がありません。肉食文明は森の木を伐採して牧草地にしてしまいます。その結果、スイスでは熊などの野生動物は絶滅しました。同様にイギリスでも熊は一千年前、イノシシは九百年前に絶滅しました。一方、日本文明は明治になるまでひとつの種も絶滅させていません。明治になった時は、オオカミも残っていました。今でも奥地に行くと、クマ、サル、シカ、イノシシなどの大型動物たちがそろって残されています。日本人にとっては当たり前でしょうが、作家のC・Wニコル氏は、奇跡の文明だと高く評価されていました。

明治になるまでの千二百年間もの間、日本人の食生活は米と野菜と魚に限定されました。牛や馬は農業に使われていましたが、彼らは家族であり、殺して食べることなどありませんでした。魚を食べる文明は、川や海を汚しません。ヘドロと化した中世ヨーロッパの川と違い、日本の川は川底まで透明で、泳いでいる魚がはっきりと見えました。今でも、大きな神社に行くと、裏山は必ず森で、そこから湧き出した水が、ケガレを流す川として神社の真ん中を流れています。神道上からも森は守られたのです。

森を壊し種を大量絶滅させてきた西洋の肉食文明に比べて、日本の稲作漁撈文明は、滋養豊かな水をこんこんと湧き出す巨木の水源の森と、豊かな森造りをしてくれる野生動物たちを保全してきたすごい文明なのです。私たちは、どうしたらこの国で水源の森を残し野生動物たちと共存できるか、解決法が鮮明に見えてきました。

社会の仕組みが見えてくる

―具体的に行動に移していきますね。

森山　県庁や役場、猟友会に電話をして、クマの絶滅を止めてほしいと皆でお願いしましたが、誰も聞いてくれなかったので、とりあえず理科教師たちで「絶滅寸前兵庫県野生ツキノワグマ捕獲禁止緊急要請」という署名を作りました。私たち教師は尼崎市内の中学校理科教師の署名を集めただけでしたが、生徒たちの会は駅に立ったり町内を一軒一軒回ったりして、毎日たくさんの署名を集めました。

どうして生徒たちがそこまで必死になるのかわからなくて、ある時、生徒たちに尋ねてみたことがあります。生徒たちは、「これはクマだけの問題ではなく、僕らの問題でもあるんです。今の自然破壊を見ていたら、僕ら、寿命まで生きられへんなとはっきりわかるんです。大人って、自然も資源もみんな自分たちの代で使い果たしてしまい、僕らに何も置いとこうとしてくれない。僕ら、寿命まで生き残りたいんです」と答えました。私は大人の一人として、彼らの言葉が胸に突き刺さり、大人の責任に気づか

されました。

県庁への署名提出には、生徒の各会の会長十六名、PTA会長、そして私たち理科教師二名で臨むことにしました。「兵庫の熊はもう絶滅します」と私に語られたクマ研究の第一人者の大学教授と、きっかけとなった記事を掲載した新聞社の記者に同行をお願いしました。

林務課の係官に「ツキノワグマを絶滅させないで下さいという署名を持ってきました」と言うと、「そんなの要りません。持って帰ってください。忙しいんです。話など聞く時間はありません」と拒否されました。私が頭を下げて「生徒たちが一所懸命に調べたので、話を聞いてやっていただけませんか」と何度も頼み込んで、やっと奥の部屋に通されました。部屋には一本の長机と椅子が三つあり、県庁の担当者二名の横に、同行してくださった大学教授が座って、私たちと向かい合う形になりました。生徒たちが、「クマの絶滅を止めてもらいたいとお願いに来ました」と切り出すと、担当者は開口一番、「兵庫県のツキノワグマは絶滅の恐れなど全くありません。ねぇ、先生」と教授の方に顔を向けました。すると、何と教授は「絶滅の恐れはございません」と、この前会った時と正反対のことを言い出すのです。私は頭が真っ白になって、次の言葉が出ませんでした。

そんな私とは違って、生徒たちは実に逞しく、それまでいろいろ調べてきたことを持ち出して、このままでは絶滅すると主張しました。担当者は、答えをはぐらかしてばかりで、それはひどいものでした。一時間半くらい経過したころ、担当者は突然、「忙しいんです。帰ってください」と切り出しました。そこでひとりの男子生徒が「最後にお願いがあります。兵庫県はスギやヒノキの人工林があまりにも多過ぎます。もう、スギ、ヒノキを植えるのをやめてください」と訴えました。すると、担当者はカンカンに怒りだして、「何をバカなことを言い出すんだ。兵庫県はこれからもますますスギやヒノキを植えていきます」と断言されました。針葉樹だけの人工林が山の四〇%を超えると、クマは絶滅すると言われていますが、当時すでに兵庫県のクマ生息地の人工林率は多くが六〇%、七〇%を超えていました。

私たちは、この教授はもうどうでもいいと思いました。部屋を出てから新聞記者さんに、「私たちに有利になることなど何も書いてほしいと思いません。今日あなたが見聞きしたことをそのまま記事にしてください」とお願いしました。すると記者は、「中学生たちが絶滅させないでくださいと言い、専門家である大学教授が絶滅の恐れなしと言った。これでは記事になりません。ぼく降りさせてもらいます」と言って帰ってしまいました。

私はそれまで学校以外の社会を全く知りませんでしたが、世の中の仕組みが見え始めてきました。この後、多くの行政マン、研究者に会う人生になっていくのですが、役人は、自分の頭で考えることをせず上から言われたことをするだけのロボット、研究者たちは、国からの研究費欲しさに権力者の顔色ばかり見て忖度発表を繰り返す御用学者。これが私たちの日本という国の実態なのだとわかってきました。生徒たちに、正義感、良心などの道徳を教えている私たち教師には信じられない世界です。

（パート2は四〇ページに続く）

参考資料：『クマとももりとひと　森山まり子会長のスピーチから』（一般財団法人日本熊森協会）、同協会ホームページ）

森山氏プロフィール

1048年兵庫県尼崎市生まれ、大阪教育大で物理を専攻。元兵庫県尼崎市立中学校教諭。2018年、21年間務めた会長を教え子にバトンタッチし、名誉会長に。この他、日本奥山学会理事、公益財団法人奥山保全トラスト評議員も務める。

そこが聞きたい！ インタビュー

時計の針を戻すことこそが人類の進歩
奥山人工林の天然林化に人生かけて二五年〈パート2〉

森山まり子氏 一般財団法人日本熊森協会 名誉会長

日本にも百万人規模の大自然保護団体を

―一九九七年、ついに「日本熊森協会」を設立しますね。

森山 大人たちは皆この問題は難しいと言いましたが、生徒たちは、「簡単です、人工林を造り過ぎてこうなったのですから、もう一度放置されて荒れているだけの奥山の人工林を伐って、山菜や木の実がいっぱいの天然林に戻したらいいのです」と、明快でした。

この後五年間、いろんな所に奥山天然林化をお願いしに回りましたが、だれもどこも動いてくれませんでした。私たちは、絶望的な気分になっていきました。

そんな時、『アメリカの環境保護運動』（岡島成行著）という本に出会いました。欧米では今、会員数が数十万人数百万人を超える巨大な環境保護団体がいくつも育っています。イギリスの「ナショナル・トラスト」は、自然を守るための法案を次々とイギリス国会に提出し、すでに六千本の法律を成立させていました。会員数が多いと、次の選挙のことを考えて、法案成立に協力してくれる国会議員が多く現れることを知りました。

わたしたちは、日本にも百万人の大自然保護団体を作ればいいのだとわかり、一九九七年春、大学生になった教え子たちと、「日本熊森協会」を立ち上げたのです。日本文明に学び、クマたちの棲める一級の森をこの国に保全する会です。春には環境教育やセミナーを開催、夏には原生林ツアーを実施して、都市からの参加者たちに原生林と人工林の中に入って見比べていただきました。秋には、兵庫県のクマ生息地で、地元の皆さんや漁業関係者と、落葉広葉樹であるドングリ類の苗木の植樹を開始しました。

熊森は相手を責めませんが、徹底して現場を調べ、自分たちの正義感と良心に従い、言うべきことはどこででもしっかり言います。国から一円ももらわず会を運営していますから、怖いものは何もありません。林野庁の拡大造林政策は日本の山を荒らしただけで、大失敗でした。奥山全域、尾根筋、急斜面、沢筋、山の上三分の一は、祖先がしていたように、早急に天然林に戻すべきです。環境省の個体数調整捕殺政策や外来種根絶殺害政策は、他生物の生命を軽視する無用の殺生であり、問題解決につながっていません。殺す前に生息地の保証や被害防止対策を取るべきです。

活動を進めるうち、いろいろな圧力が熊森にかけられるようになってきました。ネットを使っての匿名者による誹謗中傷は本当にひどいです。ウィキペディア

などの匿名者による虚偽のネット記述はなんとか再考してもらいたいですね。批判も言論の自由も確かに大切ですが、その前に名乗るべきでしょう。

日本文明が地球を救う

―会員数は増えましたか。

森山　熊森を設立して二十五年が経過しました。現在の会員数は一万九千人です。欧米の自然保護団体と比べると取るに足らない会員数ですが、自然保護団体が育っていない日本では、すでに大きな会に成長しました。日本は欧米のような市民社会ではないためか、日本人は心から賛同すると言ってくださっても、会員になるところまでは、なかなか行きません。

現在、兵庫県本部以外に、全国に二十八の支部があります。日本列島は南北に長く、自然条件が地域でかなり違いますから、その土地に合わせた支部活動が必要となります。

熊森ははクマをシンボルにしているので、クマが滅びてしまった九州には支部ができないだろうと思っていましたが、意外なことに九州の熊森会員は多いのです。福岡、宮崎、熊本に支部があります。会員になってくださった方は、クマを滅ぼした九州だからこそ、他地域に残されたクマを守りたいと言ってくださいます。私たちが、クマをシンボルにしているのは、奥山生態系の頂点に立つ動物であり、クマが生存できる自然環境を守ることで、それ以下のこまごました生き物たちが自動的に全て生き残れることを知っているからです。クマが滅びてしまった地域では、その地域に残された大型の鳥獣をシンボルに活動されたらいいと思います。それによって広大な森が守られます。

―今後、必要なことは何ですか。

森山　このままだと、地球環境を破壊し続けて人類は近い将来滅びると思います。森は地球上から消える一方です。毎年四万種の生物が絶滅していっていると言われています。日本ができる国際貢献は、どうしたら森や生物の多様性が守れるか、祖先の取り組みを伝えることだと思っています。

しかし、日本人も最近は自然からすっかり離れて都市で暮らすようになりました。自然に生かされていることがわからなくなってきています。

農業高校で講演した時、生徒たちに「人間は何に生かされていると思う？」と訊きました。返ってきた答えは「人間の力と科学の力で生かされています」というものでした。私が「農業してるんでしょ？　水はどこから来るの？」と訊くと、「ダムからです」ダムのバックにある森が見えなくなっているんですね。

アルピニストの野口健さんは、海外ではどこでも、木を伐ったら伐ったきり。伐ったら必ずその跡に植林するのは日本人だけといわれていました。今、森を失ったネパールで植林活動を続けておられます。「日本人は、本当に森を大切にするんですね」と、現地の人々が日本人に敬意を示すそうです。しかし、帰国して山に行くと、今やあちこちの山が皆伐されメガソーラーが設置されていると嘆いておられました。

今、再生可能エネルギー事業による森林破壊にはすさまじいものがあります。熊森は現在、四〇団体と連携し、全国再エネ問題連絡会を設立、共同代表と事務局を引き受けています。再エネ事業は自然破壊を伴わない都市などに限定するよう、国会議員に法改正を求めています。

全国的に、山からの湧き水が激減してきている今、山の保水力を再生するための奥山人工林の天然林化が急がれます。

食生活や人口問題は大変デリケートな問題なのであまり触れたくありませんが、食生活を米と野菜と魚に戻すこと、人口を日本列島の食料生産だけで暮らせる三千万人に戻すことで、日本文明は以前のような持続可能な自然との共生文明に戻せることを知っていただきたいです。

日本人が元々持っていた自然観、宗教観を取り戻し、世界に広めることが、地球環境を守ることに繋がります。そのためには、時計の針を戻すしかありません。それこそが現代の人類にとって大切な進歩だと思うのです。